

2010 年過去問解説

問題 1

解答：d

どの解剖書にも書いてある基本問題。

眼窩を構成するのは、前頭骨、頬骨、蝶形骨、篩骨、涙骨、上顎骨、口蓋骨の 7 つ

参考文献：A 0 法骨折治療 頭蓋顎顔面骨の内固定. p209. 医学書院

問題 2

解答：c

髄液漏は頭蓋底骨折を伴う場合に認める症状である。眼窩上壁骨折や Lefor II 型、III 型骨折を合併した場合、前頭蓋底骨折を伴うため、髄液漏や頭蓋内気腫等を生じる可能性がある（田嶋定夫. 顔面骨骨折の治療. 第 1 版. p10. 克誠堂出版）。眼窩底骨折の症状は、圧痛を伴う腫脹、皮下出血、鼻出血、皮下気腫、複視、知覚異常、上方下方視制限、眼球陥凹、眼球の下方転位などが挙げられる。

参考文献：O' Hare TH. Blow-out fractures: a review. J Emerg med, 9:253-63, 1991

問題 3

解答：c

頬部の知覚障害は三叉神経 V2（上顎神経）領域の障害であるが、三叉神経の走行と鼻骨は無関係である（ネッター解剖学アトラス. 原著第 4 版. 図 45. 南江堂）。a. 鼻骨骨折では眼球陥凹はみられない。d. 受傷後 2～3 週は非観血的徒手整復術の適応であり、それ以降は線維性に固定されてしまうため、観血的整復術もしくは骨癒合後の骨切り術を行う（標準形成外科第 6 版. p137～145. 医学書院）。b. e. 固定方法は施設によりさまざまであるが、整復後の内外固定は有効である。

参考文献：形成外科ガイドライン 5 頭蓋顎顔面疾患 第 1 版. p111～112. 金原出版

問題 4

解答：b

頬骨骨折で何となくかみ合わせが悪いと訴えた場合、それは偽の咬合不全である。開口障害や顎運動障害に伴うものとも推定されるが、主因は歯周組織、歯根膜知覚の低下・脱落と考えられる。訴えを採用して、無意味な顎間固定を施すべきではない。a. 上顎洞内の出血が後鼻孔に流れ込み偏側鼻出血が生じる。c. 転位骨片による側頭筋への圧迫・刺入や、側頭下窩での出血・線維化などに由来する開口障害である。

参考文献：田嶋定夫. 顔面骨骨折の治療. 第1版. p70～91. 克誠堂出版

d. 前額部の知覚は三叉神経第1枝（眼神経領域）であり、解剖学的に無関係である。e. 頬骨は眼窩を構成する骨である。

参考文献：A 0 法骨折治療 頭蓋顎顔面骨の内固定 外相と顎矯正手術. p209. 医学書院

問題 5

解答：d

顔面神経下顎縁枝は笑筋、口角下制筋、下唇下制筋、オトガイ筋を支配する。広頸筋は顔面神経頸枝より支配される。いずれも筋体直下より筋体内に入り支配する。

参考文献：グラフィックフェイス 臨床解剖学図譜 第1版. p78～105. クイッテンセンス出版

問題 6

解答：e

下顎骨関節突起高位骨折では保存療法として顎間固定が行われ、必要に応じて咬合挙上のためのスプリント（口腔内装置）が併用される。

参考文献：National Clinical Guidelines 1997 - Royal College of Surgeons

問題 7

解答：d

上顎骨を Le Fort I 型骨切りにより前方移動すると、咽頭と軟口蓋との前後的距离が増加する結果、鼻咽腔閉鎖機能不全を生じることが多い。

参考文献：Tahmasbi S, et al. Cephalometric changes in nasopharyngeal area

after anterior maxillary segmental distraction versus Le Fort I osteotomy in patients with cleft lip and palate. Eur J Dent. 2018;12(3): 393-397.

問題 8

解答：d

小耳症の発生率は6000~10000人に一人の発生とする意見が一般的である。外耳道は凶作から閉鎖まで様々な形があり、中耳も軽度~中等度の異常を伴うが内耳自体の障害は比較的稀であり、伝音性難聴であることが多い。第1第2鰓弓症候群の1症候として現れることがある。現在手術は肋軟骨移植術、耳介挙上術の2段階法が主流である。

参考文献：TEXT 形成外科第3版. p209-210. 南山堂

問題 9

解答：b

頭蓋形成に基づき分類は、Virchow(1851年)によって提唱された。一つの縫合が早期に癒合することで縫合線に垂直方向への頭蓋骨の成長が抑制され、頭蓋冠の狭小が生じる。頭蓋内容積を代償するために抑制された縫合線以外の縫合部に骨の過形成が生じるため、早期癒合した縫合によりそれぞれ特徴的な頭蓋形成をきたす。全縫合早期癒合症はクローバーリーフ様の形態を取る。

参考文献：標準形成外科 第6版. p83 - 87. 医学書院

a) 三角頭蓋 b) 舟状頭蓋 c) 両側：短頭蓋、片側：斜頭蓋 d) e) 両側：短頭蓋、片側：斜頭蓋

問題 10

解答：c

顔面神経の障害部位により、その症候が異なる。膝神経節より近位の障害では表情筋麻痺(a, b, d, e)、涙腺分泌減少、聴覚過敏、味覚障害が起こる。膝神経節より遠位であれば涙腺分泌障害は起こらないが、他の症状は生じる。鼓索神経より遠位であれば表情筋の麻痺のみが起こる。c) 眼球運動制限と複視は主に第3, 4, 6脳神経の障害の結果生じる。

参考文献：TEXT 形成外科第3版. p282-290. 南山堂